

2025年3月1日(土) 龍谷大学 深草キャンパス
2024年度 第30回 FD・SDフォーラム



宇大ラーニングサポーター
公式マスコットキャラクター

うさぽん

ピアサポート組織を立ち上げるために教職員は役に立つのか —宇大ラーニングサポーターを事例として学生とともに考える—

宇都宮大学

大学教育推進機構

ラーニングサポートオフィス長

基盤教育センター副センター長

教学マネジメント企画室副室長

石井 和也 ishii@a.utsunomiya-u.ac.jp

石井の概略：

- ◆ 東京→京都（約15年）→宇都宮（約7年）
- ◆ 社会学
- ◆ 昔の地図・路線図，大正-昭和初期の『鉄道旅行案内』
- ◆ 組織運営のためになんでもやる人（でした）



1. 宇大ラーニングサポーター（宇サポ）の概要
2. 宇サポ創設の経緯
3. 【参考】宇サポはなぜ熱心に活動するのか
4. 【参考】学生参画の一環としての宇サポ
5. 文献

学士課程学生数(2024年度)

データサイエンス経営学部

59名

地域デザイン科学部

616名

国際学部

465名

共同教育学部

717名

工学部

1,429名

農学部

875名

合計 4,161名

※大学院生は1,004名



地域で学ぶ、地域と学ぶ



Hands-on Experiences



本学があるのは、人口50万を超える北関東最大の都市「宇都宮」。
栃木県のほぼ中央部に位置するので、都市部はもちろん、県内の中山間地域にも学びのフィールドが広がります。
「地域とともに学生の未来を育て、学生とともに地域の未来を育てる」というスローガンのもと、
地域で深める学びの事例を紹介します。

データサイエンス経営学部

社会実装実践演習

データサイエンス経営学部では、3年次後期に、学部で修得するデータサイエンスおよび経営学の知識を活用しながら、地域の協力企業等とともに実際のデータを解析するPBL (Project Based Learning) 形式の演習を行います。演習では、企業等が実際に抱えている課題についてデータをもとに改善していくプロセスを肌で感じながら、社会実装力を身に付けていきます。「データサイエンス学系」および「経営学系」の混成で7人程度のグループを編成し、分野の異なる複数名の教員の指導を受けつつ、演習に取り組みます。学系混成グループで互いの専門性を持ち寄りながら取り組むことで、協働するマインドも育んでいきます。

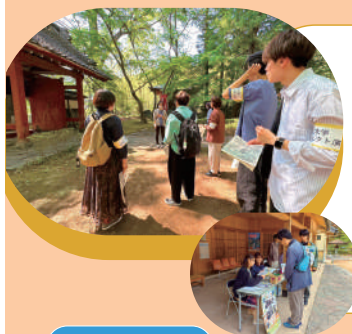


※写真はイメージです。

地域デザイン科学部

地域プロジェクト演習

地域デザイン科学部では、1年次から地域に出て学ぶ授業科目がそれぞれに用意されています。3年次では、コミュニティデザイン学科、建築都市デザイン学科、社会基礎デザイン学科の3学科が混成で5、6人のグループとなり、県内諸地域の課題に主体性をもって参加するフィールドワーク型の必修授業「地域プロジェクト演習」に取り組みます。課題解決型の授業は、教育の場で多く取り入れられていますが、宇都宮大学のこの取組みには2つの大きな特徴があります。実際に地域の課題に直面し、既に取組んでいる自治体職員や団体の方たちと一緒に課題の解決に向けて取組めること。同じ学科の仲間だけではなく、異なる専門性をもつ仲間と共に取組めること。このように、さまざまな立場からの視点を得て、調査設計、課題発見、解決策提案...と次第に形にしていく過程は、1つの学科だけでは得られない多くの深い学びに満ちています。



国際学部

地域とともに持続可能な脱炭素・循環型社会を探究する「UU3Sプロジェクト」

災害・少子高齢化など多様な問題を、多目的かつ同時に対処する方策として注目されているのが「ローカルSDGs/地域循環共生圏」という考え方です。栃木県は都市部と農村部が混在する「ローカルSDGs」の推進に好ましい地理的条件で、地域循環共生活動も多くの団体によって行われていますが、資金的制約や高齢化などの課題に直面しています。一方、SDGsや地域の課題解決に向けて行動したいと考える市民や学生も多数います。このような背景から UU3Sプロジェクトでは、学生が地域NPOの里山保全や小中学生向け再エネ教育講座などに参加して多様な実践経験をたっぷり、オンラインSDGs上映会などを通してわかりやすく社会に伝え対話の機会を育んでいます。



共同教育学部

教職ボランティア入門・学校支援ボランティア

教師の道を志す学生に課される、数週間におよぶ教育実習には不安を感じる人も多くかもしれません。共同教育学部では、実習に入る前にも学校現場で活動する機会が設けられています。小・中学校等のニーズに応じて教職センターが窓口となり、希望する学生を派遣する「学校支援ボランティア」制度と、2年次に授業の一環として小学校で活動する教職ボランティア入門です。小・中学校の先生のサポートをしなが、授業中や休み時間、放課後に児童生徒の学習や活動の支援を行うことで現場での対応力も育まれています。このような活動を通して地域に支えられながら、自らの学びを深めています。



工学部

地域の企業や自治体と連携したプロジェクトへの参画

機械システム工学コースの星野研究室では、観光や物流、新たな交通手段として、パーソナルモビリティロボットの開発を行っています。研究室のプロジェクトの一つであった地域企業と共同で制作した試作機は、完成後、栃木県庁において多くの関係者の前で発表する機会が設けられていました。このプロジェクトには研究室の学生が主体的に取り組み、試作機ではあるものの、自身の組織の外側の組織と連携して、「モノ」を実社会に送り出すというプロセスを実際に経験し、エンジニアとして貴重な経験を得ました。工学部では、地域の企業や自治体と連携したプロジェクトがいくつも進行しています。企業や自治体とともに、社会の課題解決や発展に寄与することはもちろんのこと、この例のように、プロジェクトに学生を積極的に参画させることにより、理論と実践の両立を伴った、即戦力として活躍できるエンジニアの育成に努めています。



農学部

小さな拠点「里山キャンパス益子家」プロジェクト

農業経済学科の西山研究室の学生が中心となり、益子町の農村地域にある古い小さな空き家を改修し、里山ゼミ室として活用する取り組みを始めています。学生や地域内外の方と交流するだけでなく、当事者の視点で農村地域の課題解決を考え、実践していくアクションリサーチの拠点としていくことも目指しています。学生たちが考えた益子家のコンセプトは、①持続可能で里山を実現できる場所、②やってみたいができる場所、③多様性が集う場所、④食と農が自分自身に結びつけられる場所です。空き家改修の他、空き家前の棚田を再生し、ゆうだい 21の無農薬栽培、マルシェの開催などを行いながら、農村の生産や生活への理解を深めています。



組織の概要と目標 (2025年2月現在)

大学院生	3名
4年次生	1名
3年次生	9名
2年次生	4名
1年次生	5名
合計22名	



宇大ラーニングサポーターの主な活動内容

定期的な相談窓口 (毎週火曜日18～21時)

ラーニング・コモンズに宇大ラーニングサポーターが常駐し、学生生活や学業について相談や質問に応じる。相談に際して予約等は不要。

学修に関する イベントの実施

履修相談会、レポートの書き方講座、PCの使い方講座、各種勉強会等、宇大生のよりよい学びを促すためのイベントを高頻度(2024年度前期は毎週1回以上)で実施。

基盤教養科目の 授業サポート

ループリック評価を必ず実施することになっている「**基盤教養科目**」に入り、受講者がループリックを用いた自己評価を円滑に行えるようにサポートする。

上記以外にも、様々な活動を精力的に行っている。
詳細は**宇大ラーニングサポーター公式ウェブサイト**を参照。



宇大ラーニングサポーターの目標

すべてのX大生がX大学という場を最大限に活かし、主体的かつ自律的に学びきって卒業できるよう、学生の立場から同じ目線でサポートを行う。

サポーター間の議論を経て、2024年2月15日に決定。

宇大ラーニングサポーター (2023年10月～)

定期相談窓口 (サポーター全員で対応)

- ▶学部生の宇大ラーニングサポーターが、**学生生活面での相談や、学生間のつながり創出**の手助けを行う。
- ▶学部生及び大学院生の宇大ラーニングサポーターが、**学修環境の整備や、能動的な学修を促す企画の実施**を行う。

アカデミックサポート

定期相談窓口のサービスの1つとして
大学院生・学部4年生が対応

- ▶大学院生・学部4年生の宇大ラーニングサポーターが、**学修面での困りごと(レポートの書き方や、数物化等の基礎的な学修方法)について相談対応**を行う。

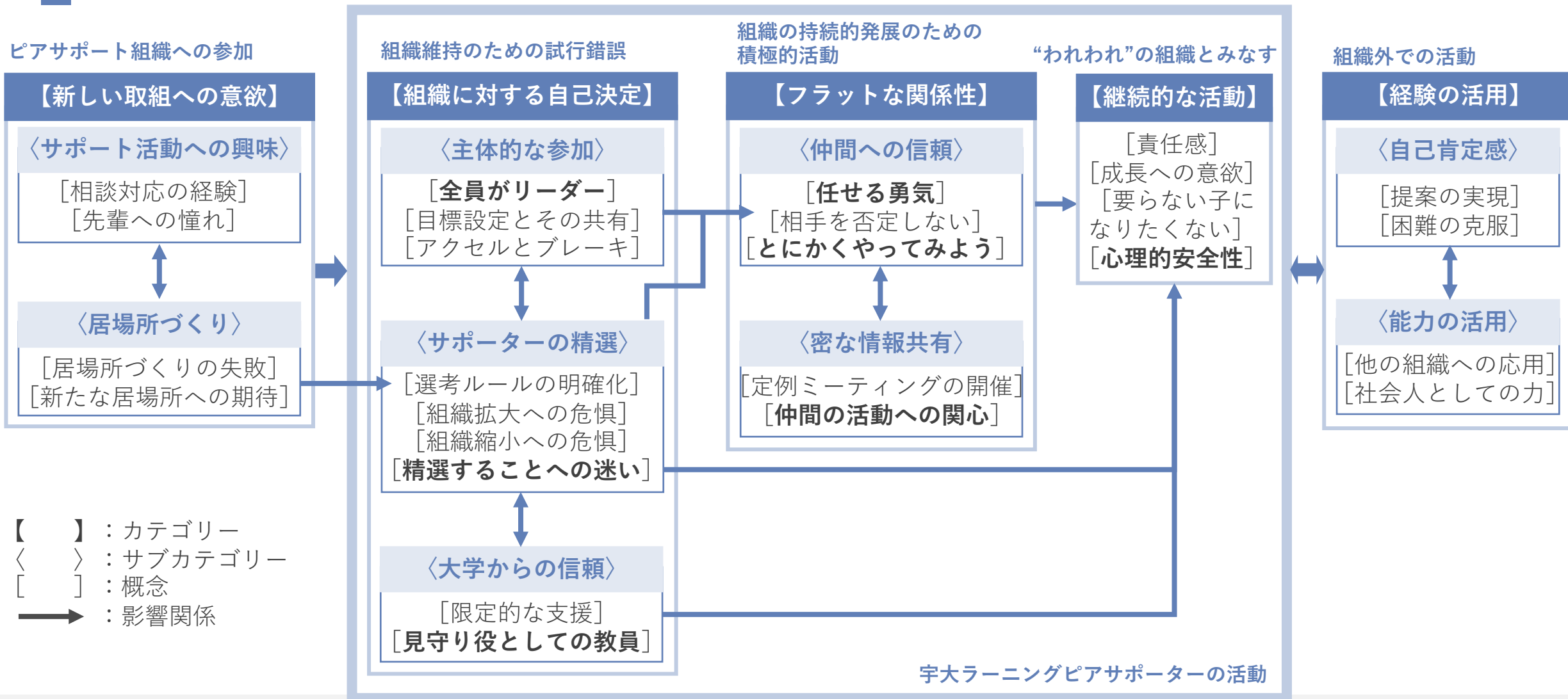
サポート活動に対する助言 ▲ サポーターに対する研修

ラーニングサポートオフィス(2023年4月～)

活動内容

- ① 授業外での学修サポート
- ② 学生生活面の相談対応
- ③ レポートの書き方や、人文・社会・自然科学系の基礎的学修のサポート（大学院生，学部4年生のみ）
- ④ 宇大生の学修に役立つイベントの企画・実施
- ⑤ 基盤教養科目での授業サポート
- ⑥ リベラルアーツ科目「異文化理解の世界B（ピアサポート入門）」
「異文化理解の世界C（ピアサポート実践）」への参加
- ⑦ ラーニング・コモンズの環境整備と夜間の管理
- ⑧ 毎週火曜日18:00-21:00に実施の定例ミーティングへの出席（必須）

インタビューの結果から見る宇サポの特徴 （調査の詳細は「3.【参考】」参照）



宇都宮大学広報誌 UUnow第58号



公式ウェブサイト



高松 将人
工学部基礎工学科4年

一人一人が主体的に行動する

宇大ラーニングサポーターは特定のリーダーを決めずに、全員がリーダーシップを発揮しながら活動することが一つの特徴です。各自が主体的に動くことを意識して活動しています。私は元々、主体的な行動は苦手でしたが、一人一人が自立しつつも皆で支え合いながら活動してきたので、今では積極的に行動できるようになり、成長を実感しました。

コロナ禍での経験が原動力に

入学したときはコロナ禍で、オンライン授業が続きました。友達ができず、先輩も知らず、縦横のつながりがなくて情報を収集できないので学修面で苦労しました。だからこそ、ラーニングサポーターの活動を通して困っている学生を手助けしたいという思いがあり、その実現が一番のやりがいです。

ピアサポート団体の交流会 “Peer Link with U”

2月23日、宇大ラーニングサポーターの発案による交流会を峰キャンパスで開催しました。この交流会は、大学や高校でピアサポートに携わっている学生同士の交流を深めるとともに、ピアサポートに求められる知識やスキルを身につけることが目的です。当日だけではなく準備段階から交流を深めることを目指し、他大学の学生と定期的にミーティングを行い、企画内容について議論を重ねました。

当日は宇大を含め5校のピアサポート関連団体が集まりました。各校のサポート組織について情報交換をしながらピアサポート組織の在り方考えるセッションと、ピアサポートを行う上で必要なファシリテーションや傾聴力などについて学ぶセッションの2つに分かれ、議論を行いました。

宇大ラーニングサポーターは、今回の交流会での学びを生かし、より質の高いサポートを提供していきます。



佐藤 芽以
文学部森林科学科2年

自分と同じ宇大生のために

人と話すこと、関わるのが好きなので、それを誰かを助けることに生かせたいという思いで、この活動に参加しました。自分と同じ宇大生をサポートすることを通じて、自分の働きが役に立っていることを実感できます。オープンキャンパスでは高校生が持つ不安の解消に貢献することができ、今後も続けたいと思いました。

仲間から学んだ「傾聴と受容」

新しい取り組みを始めようと呼びかけたときに手伝ってくれる仲間の存在は心強いです。先輩の活動に学ぶことも多く、特に相手の話を聴き、相手を受け入れる「傾聴と受容」が大切だと思いました。自分のコミュニケーションにも応用でき、自分を見直すきっかけになりました。



黒岩 美穂
国際学部国際学科2年

組織づくりを経験

いろいろのときにコロナ禍で苦労していた思いがあり、1年生のときから活動していました。しっかり活動できる組織にするためにはどうしたらいいかを考え、そのプロセスに携われたことはいい経験でした。新入生向け履修相談会では、一人一人に寄り添って話をしていく中で、不安な新入生が安心してくれたことが嬉しかったです。

大学での学修方法を考えるように

学修面のサポートを通じて学修へのアプローチを考える機会が増えました。レポート作成やディスカッションで何が必要なのか、プレゼンテーションにおける質問力など、入学したばかりの頃はそれほど興味なかった、大学で勉強するためのスキルに興味を持つようになりました。



宮澤 岳輝
共同教育学部数学分野4年

学生だからこそできること

人に寄り添ったり、人の話を傾聴したりという教員に必要なスキルを磨きたいという思いから参加しました。履修相談会などでは、同じ学生の目線で話を聴き、アドバイスをしました。学生同士だからこそ聴ける悩みもあるので、そこに携わることができるのは、ラーニングサポーターの魅力であり、やりがいだと感じています。

着実に改善していく実行力

学生を支援するといっても自分も学生なので、自己研鑽に励んでいて、実行する力が高まってきたと感じます。また、「学長ティールタイム」で広報活動の必要性について学長に直接アピールする機会があり、その成果として教務ポータル上でラーニングサポーターの情報を発信できるようになりました。



古川 京弥
国際学部基礎工学科4年

過去の自分と重なる新入生

新入生のときにコロナ禍で苦労した経験から、困っている学生の相談相手になりたいと思ったことがサポーターになった動機です。4月の履修相談会に参加した新入生が入学当時の自分と同じような悩みを抱えていると感じ、経験からアドバイスしました。感謝されたときはこの活動をやっている良かったと思いました。

自分で答えを出せるようにサポート

学生からの相談に対応していくうち、相手にどんなバックグラウンドがあって、なぜその問題にたどり着いたのか、過程を考えるようになりました。サポーターは答えを提示するのではなく、学生自身が答えを出すよう促すのが役割だと思うので、その過程を気にかけるようにしています。



※今号の表紙は宇大ラーニングサポーターの協力のもと、主な活動場所であるラーニング・commonsで撮影しました。

宇大ラーニング サポーター

特集2

同じ目線で支え合う心強い仲間たち

相談対応

- 学生生活や進路、履修登録に関することなど、幅広い相談に対応。
- 週に1回の定期相談窓口を開設するほか、Web上でも相談を受付。



アカデミックサポート

大学院生及び学部4年生がレポートの書き方やプレゼンテーションの方法、数学・物理・化学等の学修方法など、学術的な内容の相談に対応。定期／不定期にデスクを開設。

学修環境の整備

- 学修環境の整備や、能動的な学修を促すための企画・相談を実施。
- 学修に役立つ情報をまとめた掲示物や冊子の作成。

ラーニング・commons（峰キャンパス5号館）

全ての宇大生が自主的な学修のために利用できる学びの空間。自習のほか、話し合いにも適した座席配置や壁一面のホワイトボード等の設備に加え、個室型ワーキングブースや少人数で利用できる場所もあり、多様な学修に対応。

開室時間 平日午前10時～午後8時50分（夜間スタッフ不在時は午後5時まで）



ラーニング・commons
ウェブサイト

イベントの企画・実施

- 4月の新入生対象履修相談会をはじめ、レポート相談会、各学部ゼミ紹介イベントなど、宇大生の「学修力」を高めることを目指した様々なイベントを企画・実施。



新入生対象履修相談会



国際学部ゼミ紹介イベントの様子

令和6年度新入生対象
履修相談会
日時：令和6年4月4日（木）
～19日（金）
場所：ラーニング・commons
時間帯等詳細はSNSで告知



●宇大ラーニングサポーターの最新情報はこちらから



ウェブサイト



X



Instagram

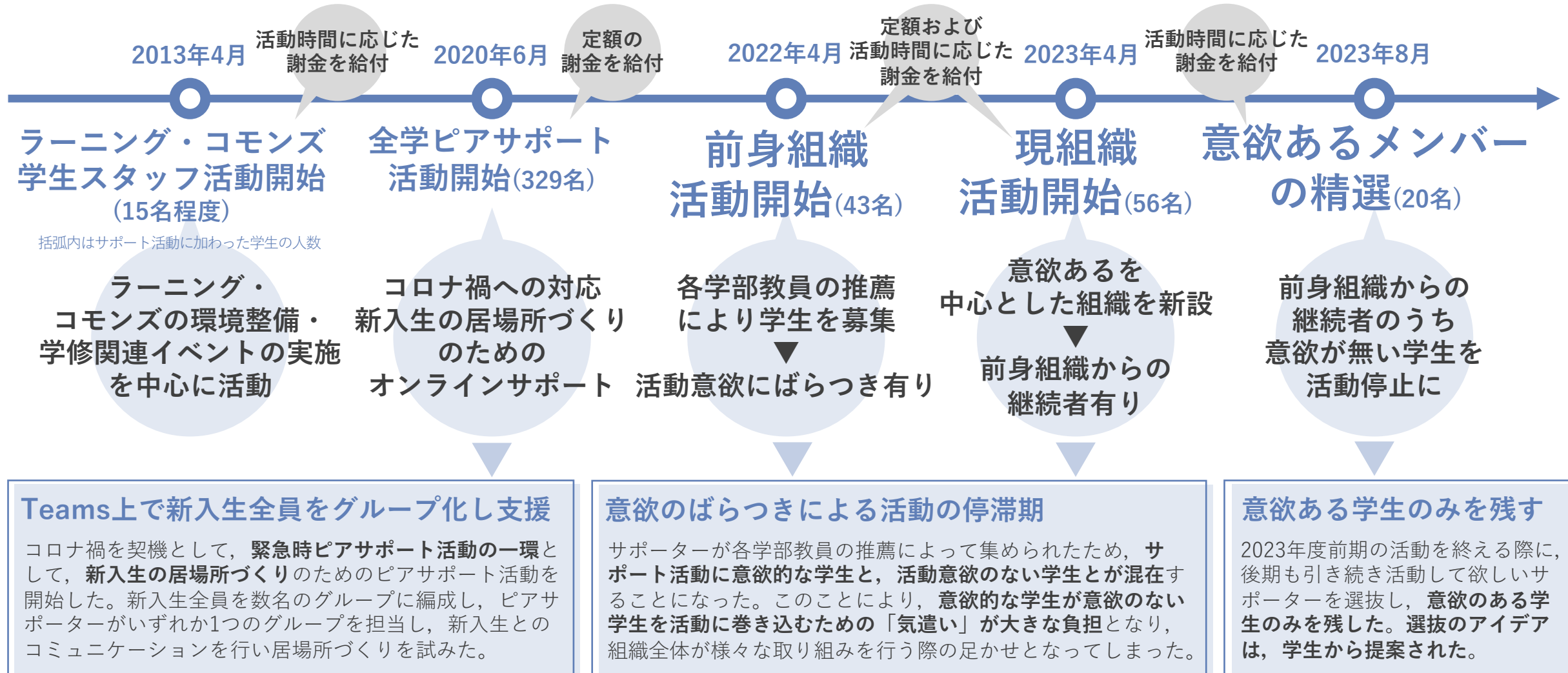


消毒投票箱：机を消毒した使用済みウェットティッシュで投票する。投票テーマは月替わり。結果発表はテーマに関連する知識を紹介するなど、学修に役立つ工夫も。



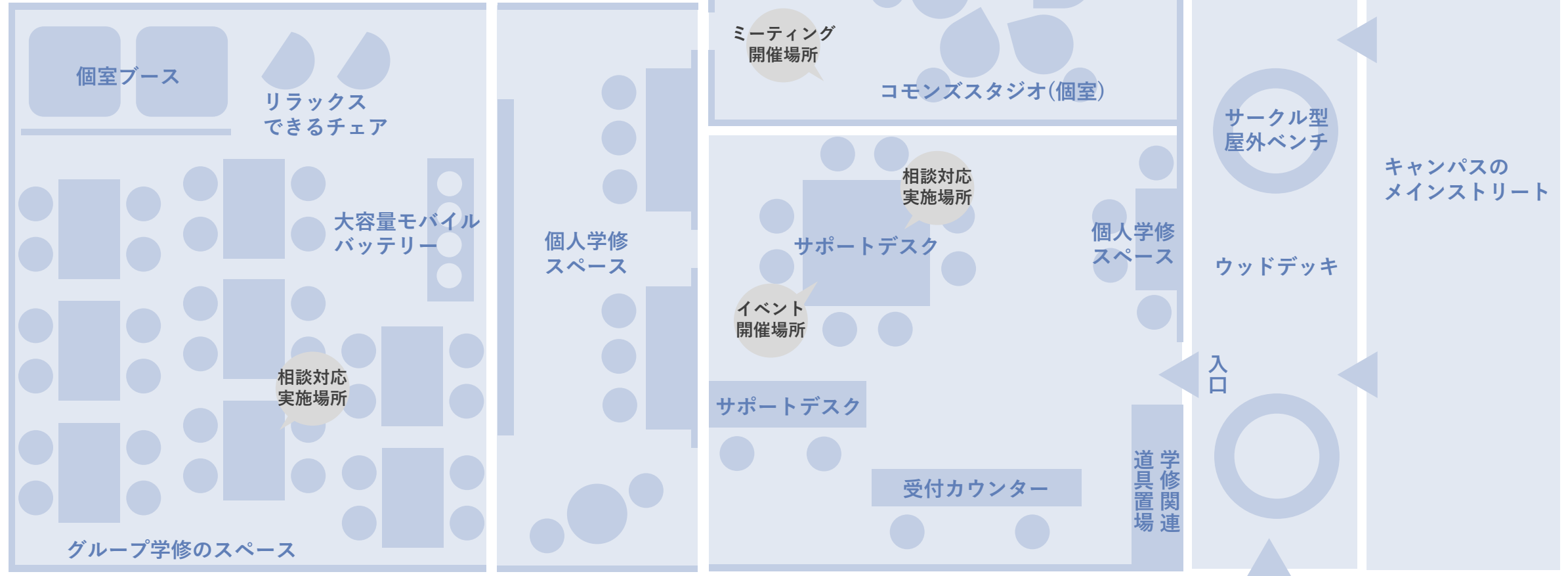
個室型ワーキングブース：オンライン授業や集中して学修したいときに利用可能。

宇大ラーニングサポーターの沿革



主な活動場所 (ラーニング・commons)

火曜日18-21時に相談窓口を開設している(同時時間帯にミーティングも実施)。
各自の都合に合わせてサポーターが滞在し、随時相談対応を行う。
相談者が訪れない場合には、学修関連イベントの実施に向けた準備を行う。





1. 宇大ラーニングサポーター（宇サポ）の概要

2. 宇サポ創設の経緯

3. 【参考】宇サポはなぜ熱心に活動するのか

4. 【参考】学生参画の一環としての宇サポ

5. 文献

新型コロナウイルス感染症の

拡大に伴う緊急支援策 **総額約2億円**

緊急学生支援 パッケージ

緊急奨学金（給付型）

生活支援を要する状態となった学生に支給します。

第一弾

▼日本人学生向け

10万円を300人に給付 5月支給済

- ・「飯村チャレンジ緊急奨学金」（寄附者：飯村 慎一氏）
- ・「飯塚緊急奨学金」（寄附者：飯塚 真玄氏）
- ・「宇都宮大学3C基金」



▼留学生向け

5万円を100人に給付 6月支給済

- ・「増山緊急奨学金」（寄附者：増山 律子氏）



第二弾

36万円を30人に給付 7.8月支給済

- ・「飯村チャレンジ緊急奨学金」増枠（寄附者：飯村 慎一氏）

第三弾

緊急奨学金（給付型）追加募集 計画中

一時貸与制度の創設（無利子）

生活や修学が困難となっている学生に、無利子貸与します。

上限25万円を200人に貸与 継続中

授業料免除 前期9人追加 実施済

授業料納付期限の延長

[前期] 5月末日 ⇒ [変更後] 7月末日 実施済
[後期] 11月末日 ⇒ [変更後] 1月末日 実施予定



働く場の提供を通じた経済支援 継続中

大学内で学生アルバイトを雇用します。（TA、RA、SA）

ノートパソコン75台を貸与

（寄附者：株式会社TKC）

5月実施済



学生ピアサポート制度 継続中

2年生以上のサポーター390人が新入生を支援します。



◎その他、国の給付金や高等教育の修学支援新制度、自治体・各種団体等による奨学金などを通じて、誰ひとり取り残さず学生生活の継続を支援します。





ブレンディッド・ラーニングの推進と 多面的評価による自律的学修者の育成 ：LMSと連携したe-ポートフォリオの活用を通じて

教学マネジメントの核となる ブレンディッド・ラーニングの推進

宇都宮大学DX推進計画の一環である本取組は、これまでにない多様な教育・学修データをもたらす。これらを活用し、教育・学修成果を検証・可視化することで、全学的教学マネジメントを動かし、教育・学修の質向上をめざす。

学修者本位の教育の実現

ブレンディッド・ラーニングでの学びにおいて、自己評価力の向上や学修コミュニティの活用を可能とする。このことで、激しい変化に晒される社会において学修の自己管理と学びのバージョンアップができる自律的学修者を育成する。



01

教員による評価 + 自己評価 + ピア評価

ルーブリックに示された明確な目標に沿った学修を進め、成果をe-ポートフォリオ上で自己評価によっても可視化することで、学修の自己管理を可能とする。さらに、LMSとe-ポートフォリオの連携により学生同士のピア評価を実施し、オンライン上においても、学生同士の学び合いを深化させる。このことを通じて、自律的学修者を育成する。



02

学びのコミュニティ + 個別最適な学修支援 + デジタル学修コンテンツ

LMSとe-ポートフォリオを連携させることにより、オンライン上で学生や教員からなる学びのコミュニティを形成する。このコミュニティでは、個別最適化された学修支援を提供するとともに、e-ポートフォリオを通じて、正課内外における学修仲間を見出すことを可能とする。さらに、学修を深化させるために、いつでも学修状況に応じたデジタル学修コンテンツが利用できるデータベースを構築し、自律的学修者を育成する。



03

三層からなる 教育成果と 学修成果の可視化

機関・教育プログラムレベルでは、ブレンディッド・ラーニングの実施状況を調査し、可視化する。授業科目レベルでは、GPA、学生のパフォーマンス、LMS記載事項等を調査し、可視化する。学修者レベルでは、学修前・中・後の三時点における学修状況を調査し、可視化する。このことで、社会への説明責任も果たす。

基盤教育のスタンダード （学修・教育目標）

宇都宮大学では、基盤教育でみなさんが達成すべき学修・教育目標として、「基盤教育のスタンダード」を設定しています。基盤教育では、これらの目標の達成を可能とするための科目を開設し、「宇大スタンダード」に定める6つの力の基礎を固め、幅広い教養と行動的知性を備え、未来の社会を拓き支える人間としての基盤を育成します。

宇大スタンダード



6 未来の社会を拓き支える知と行動力を統合する能力を培うことができる。

協働力

課題解決力

5 自己の興味関心に沿った学問分野を学ぶことを通じて、自ら問いを立て、その解決策を他者とともに考えることができる。

協働力

課題解決力

4 社会的・職業的自立に向け、必要な知識、技能、態度を養うことができる。

情報活用力

論理的思考力

表現力

3 現代社会を理解し、活躍するためのリテラシーを培うことができる。

情報活用力

論理的思考力

表現力

2 「人間と文化」，「社会と人間」，「自然と環境」，「様々な言語」に関する基本的知識や考え方を学ぶことから、幅広く深い教養と豊かな人間性を養うことができる。

学修力

1 大学での自律的な生活や学びを理解することができる。

学修力

学生向け

令和4年度までの基盤教育

初期導入科目	新入生セミナー(2)
リテラシー科目	EPUU(8), スポーツと健康(2), データサイエンス入門(2), SDGs入門(1)
教養科目	人文科学系科目, 社会科学系科目, 自然科学系科目, 初習外国語系科 目, 総合系科目 学部ごとに 必要単位数が異なる。
基盤キャリア 教育科目	キャリア創造科目 学部ごとに 必要単位数が異なる。

- ・括弧()内は全学部共通の必修単位数。
- ・専門導入科目は, 令和5年度以降は専門教育科目に移行。
- ・留学生日本語科目については省略。

令和5年度からの基盤教育

初期導入科目	新入生セミナー(2)
リテラシー科目	EPUU(8), スポーツと健康(2), データサイエンス入門(2), SDGs入門(1)
教養科目	基盤教養科目(2) 人間と文化への扉, 社会と人間への扉, 自然と環境への扉, ものづくり体験
	リベラルアーツ科目 学部ごとに 必要単位数が異なる。 人文科学系科目, 社会科学系科目, 自然科学系科目, 初修外国語系科目, 総合系科目, 基盤キャリア教育科目
	高度教養科目(1) 3・4年次に履修 高度教養セミナー

※従来の「教養科目」とは
意味合いが全く異なること
に注意

新規
科目区分

科目区分
の再編

新規
科目区分

基盤教養科目（全学部必修2単位）

人間と文化への扉

社会と人間への扉

自然と環境への扉

基盤教養科目は左記の3つの科目から構成される。なお、各科目には複数のテーマが設けられており、それらのテーマから1つを選んで履修する。

履修の方法

科目ごとに設定されているテーマの中から1つを選んで履修する。

例: 人間と文化への扉 を履修する場合

テーマ

- 認知心理学入門
- 日本の古典
- 論理的思考
- 初修外国語への誘い
- ...



これらのテーマの中から1つを選んで履修する。どのテーマを選んだとしても、「人間と文化への扉」という科目を履修したという扱いになる。

※「人間と文化への扉」の中のテーマを2つ以上履修することはできない（教務ポータルが登録を受け付けないシステム）。

授業科目名	学期	曜日時間	授業テーマ名	時間割コード	開講場所
人間と文化への扉	前期	水5-6	Aカデミック・スキルズ入門	G880009	峰
	後期	月5-6	英語とつきあうために	G880005	峰
	後期	月5-6	初修外国語への誘い	G880006	峰
	後期	火3-4	Aカデミック・スキルズ実践	G880010	峰
	後期	木3-4	認知心理学入門	G880001	峰
	後期	木5-6	日本の古典	G880007	峰
	後期	金7-8	論理的思考	G880004	峰
社会と人間への扉	前期	火3-4	宇大を学ぶ	G880109	峰
	前期	水9-10	3.11と学問の不確かさ	G880103	峰
	前期	集中	ダイバーシティ社会の中の男女共同参画フィールドワーク編	G880105	学外
	後期	月3-4	ダイバーシティ社会の中の男女共同参画	G880104	峰
	後期	月5-6	ダイバーシティ社会の中の男女共同参画	G880110	峰
	後期	月5-6	多文化共生論入門	G880101	峰
	後期	月5-6	人と社会をつなぐ地域デザイン学	G880106	陽東
	後期	月7-8	遊び論と遊び指導	G880107	峰
	後期	集中	人間と社会	G880108	峰
自然と環境への扉	前期	火3-4	野外における野生動物識別テクニックの基礎	G880201	峰
	前期	水7-8	フィールドワークの理論と実践	G880203	峰
	後期	月3-4	数学の世界	G880202	峰
	後期	月3-4	情報の発信技術の演習	G880209	陽東
	後期	月5-6	生物資源の利用を考える	G880211	峰
	後期	月5-6	知能機械としてのロボティクスと社会実装	G880207	陽東
	後期	月5-6	地域デザインの工学と文化	G880213	陽東
	後期	火3-4	化学・技術史	G880206	陽東
	後期	木5-6	おいしい栃木	G880210	峰
	後期	金7-8	データでみる栃木	G880208	陽東
	後期	未定	人と環境をつなぐ	G880212	峰
	通年	不定時	里山のサステイナビリティを考える	G880204	学外
	通年	不定時	環境マネジメント実践	G880205	陽東
ものづくり体験	後期	木9-10	ものづくり体験	G880301	陽東

※「ものづくり体験」については、「工学部の学生」は専門科目での履修となるので注意してください。

30科目

授業の内容・到達目標・進め方

1年次の時点での宇大スタンダードの獲得状況を把握する

授業の内容

人文科学／社会科学／自然科学における**重要な論点や考え方に触れる**ことで、基本的な知識の修得と、**自ら問いを立て、それに対する答えを見出そうとする姿勢の修得**を目指す。

到達目標

人文科学／社会科学／自然科学の**基本的な知識**を身につけ、その過程において**宇大スタンダードに明記されている汎用的能力を身につける**ことを目標とする。具体的には、次の通りである。

授業の進め方

知識を身につけるだけでなく、授業での学びを通じて宇大スタンダードに記載の6つの力を身につけるために、**ルーブリックを活用**する。



宇大スタンダードの6つの力

「宇大スタンダード」は、宇大での4年間の学びを通じて獲得すべき6つの汎用的能力を意味しています。これらの汎用的能力は、大学での学びに留まらず、職業や社会生活の中でも活用されることが期待されています。



宇大STDとルーブリックの活用

従来の成績評価（秀・優・良・可）で測れる学力だけではなく、多様な力を測り、可視化していく。このような多様な力を測るためには、各力の達成度の指標が必要になるため、右に記すルーブリックを活用する。

ルーブリックを活用することで

学修の目標を確認しながら自己評価を行おう。

ルーブリックとは、授業で求められる目標を確実に把握するとともに、それらの目標をどの程度達成できているかを確認することで、今後の学修で必要となる取組を自分自身で理解するためのツールです。皆さんは、まず「基盤教養科目」にてルーブリックを活用することになります。

宇都宮大学のルーブリックは、宇大スタンダードの6つの力に関する達成度を4段階に分け、各段階の基準を文章で表現しています。このようなルーブリックを活用することにより、宇大スタンダードの6つの力をどの程度身につけたか、しっかりと把握することができるようになります。

新入生セミナーにて配布

ルーブリックの例（一部省略）

※実際に授業で用いるルーブリックとは異なります。

4段階の達成度				
宇大STD	4	3	2	1
論理的思考力	資料や情報を効果的に選択することで、自分の考えを論理的に説明している。	資料や情報を示し、自分の考えを論理的に説明している。	自らの考えを矛盾や飛躍なく論理的に説明している。	
情報活用力	明確な目的のために十分な量の資料を収集している。	多くの資料を収集している。		
表現力	正確な言葉表現を用いることで…	情報活用力と表現力は十分に身に付いているようだ。自分の強みをもっと伸ばそう。	「み」を用いて…	
学修力	自ら進んで知識や能力を身につけるために…	知識や能力を身につけるために…	必要なときにのみ…	
協働力	他の学生と共に活動する際に、自分の役割を理解し…	他の学生と共に、積極的に声を…	論理的思考力・学修力・協働力はもう少し伸ばす余地がありそうだ。	
課題解決力	物事を複数の側面から見ることで…	自らの確な問いを立て…	自らの問いを立て…	

課題解決力を伸ばすために、今後の学修計画を真剣に見直す必要がありそうだ。

ルーブリックの活用のコツ

皆さんは、教務ポータルから「基盤教養科目」のルーブリックを閲覧することができますので、右の手順でルーブリックを活用しましょう。なお、教務ポータルは、「宇大を学ぶためのツールを知ろう。」に記載のQRコードもしくはURLからアクセスして下さい。

第1回目の授業

第1回目授業までに必ずルーブリックを閲覧して、授業の目標を把握し、具体的な学修計画を立てる。

授業の中盤

ルーブリックを用いて自己評価を行い、自分の改善点を多面的に把握し、学修計画を修正する。

授業の最終回

ルーブリックにより最終的な達成度を把握し、授業内外で今後実行すべき取組を具体化する。

卒業までに…

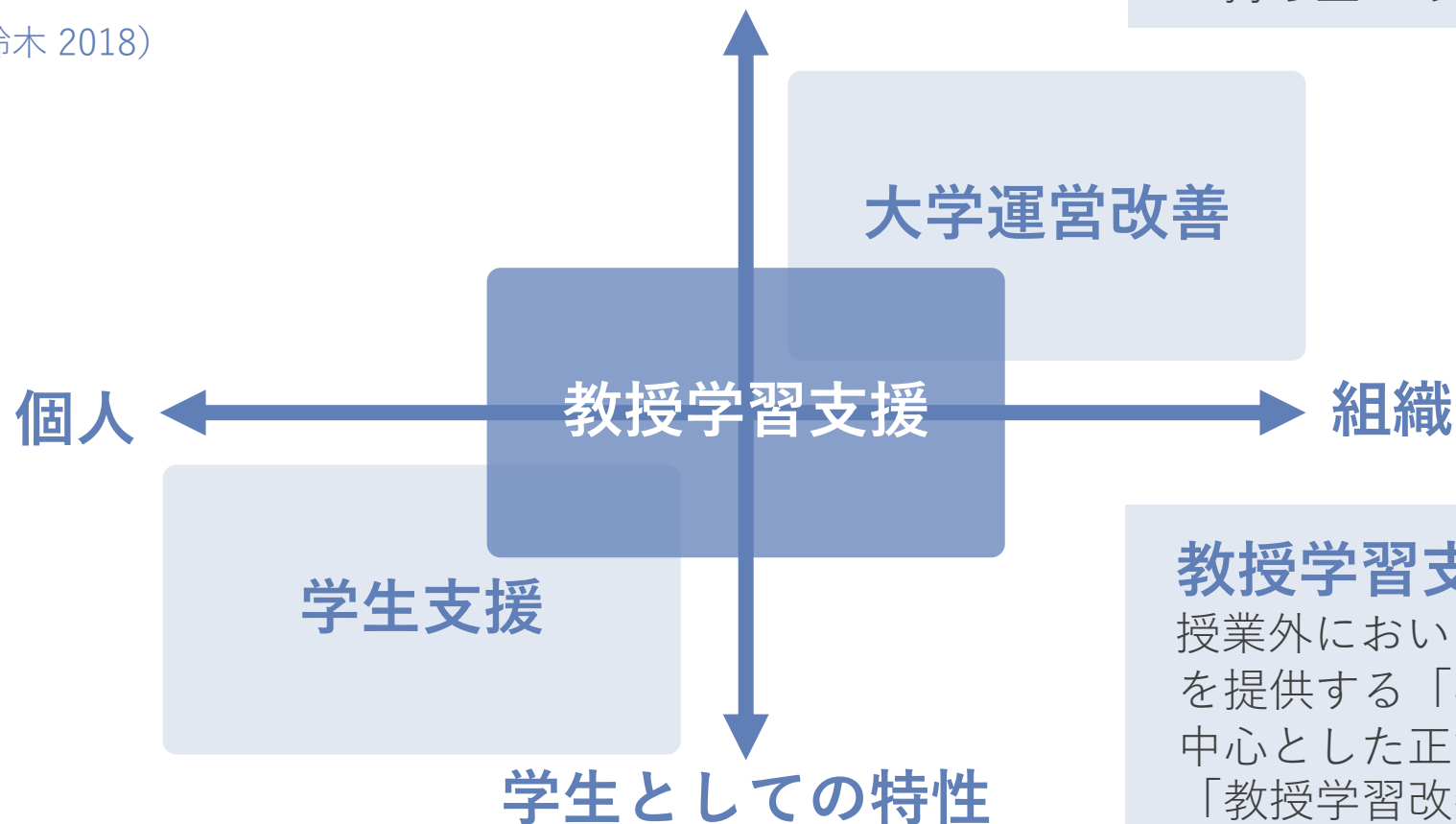
卒業までに、宇大スタンダードを十分身につけたと自信を持って言えるようになる。

ピアサポートの多様性

(学生参画については「4.【参考】」も参照)

学生参画が進む三領域の
位置付け (鈴木 2018)

活動に応じた専門性



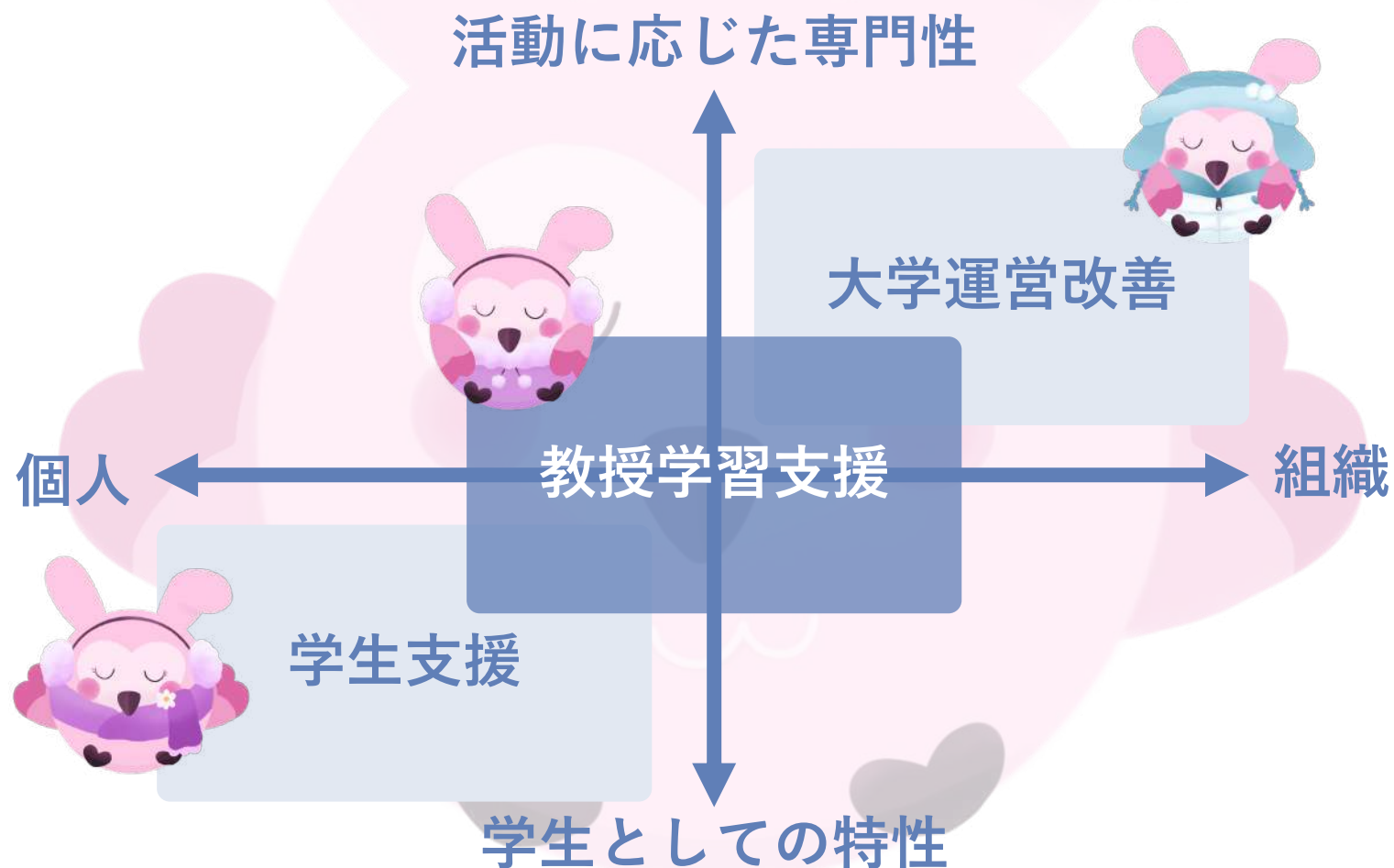
大学運営改善

参画する学生は、全学生を代表する責任を有し、責任に見合った高い資質・能力の持ち主であることが求められる。

教授学習支援

授業外において教育課程に関連する支援を提供する「学習支援領域」と、授業を中心とした正課教育での支援を展開する「教授学習改善領域」をまとめたもの。

学生による自律的な組織として、学生たちには宇サポに居場所を見出してもらいながら、三つの領域をカバーする学生参画を実現していきたい（という長期的な野望）。





高松 将人
工学部基盤工学科4年

一人一人が主体的に行動する

宇大ラーニングサポーターは特定のリーダーを決めずに、全員がリーダーシップを発揮しながら活動することが一つの特徴です。各自が主体的に動くことを意識して活動しています。私は元々、主体的な行動は苦手でしたが、一人一人が自立しつつも皆で支え合いながら活動してきたので、今では積極的に行動できるようになり、成長を実感しました。

コロナ禍での経験が原動力に

入学したときはコロナ禍で、オンライン授業が続きました。友達ができず、先輩も知らず、縦横のつながりがなくて情報を収集できないので学修面で苦労しました。だからこそ、ラーニングサポーターの活動を通して困っている学生を手助けしたいという思いがあり、その実現が一番のやりがいです。



本日登壇する 2名の宇サポ

学生の目線から宇サポの活動内容や特徴について紹介しながら、日頃の活動において宇サポの担当教職員が役に立っているか否かを率直に話します。



黒岩 美穂
国際学部国際学科2年

組織づくりを経験

いろいろなことに挑戦してみたいという思いがあり、1年生のときから活動しています。しっかり活動できる組織にするためにはどうしたらいいかを考え、そのプロセスに携われたことはいい経験でした。新入生向け履修相談会では、一人一人に寄り添って話をしていく中で、不安気な新入生が安心してくれたことが嬉しかったです。

大学での学修方法を考えるように

学修面のサポートを通じて学修へのアプローチを考える機会が増えました。レポート作成やディスカッションで何が必要なのか、プレゼンテーションにおける質問力など、入学したばかりの頃はそれほど興味がなかった、大学で勉強するためのスキルに興味を持つようになりました。

1. 宇大ラーニングサポーター（宇サポ）の概要

2. 宇サポ創設の経緯



3. 【資料】宇サポはなぜ熱心に活動するのか

4. 【資料】学生参画の一環としての宇サポ

5. 文献

調査の方法

インタビュー調査を通じ、宇都宮大学のピアサポート組織を立ち上げるプロセスにおいて、サポーターが何を考え、どのような関与を行ってきたかということを明らかにする。

「組織の立ち上げ」という一見面倒に思える取り組みに加わり、多くの時間と労力を費やし活動を行ってきた学生は、何に突き動かしてきたのかを知りたい、という素朴な思いが根底にある。

インタビューの概要

2024年3月～5月にかけ、宇大ラーニングサポーター20名に対し、1人あたり1時間～2時間30分の半構造化インタビューを実施した。

質問項目

- ピアサポート活動に参加しようと思った動機は何か。
- ピアサポーターとして活動する際のモチベーションはどのようなものか。
- 他の活動とピアサポート活動との相違点・共通点は何か。
- 高校までに取り組んできたことがピアサポーターとしての活動に影響を与えているか。
- ピアサポーターとしての活動経験をどのように活かそうか。
- ピアサポート組織を立ち上げる上で重要だと思うことは何か。

サポーターと報告者との関係

インタビューを行う報告者は、宇大ラーニングサポーターの担当教員である。そのため、サポーターが報告者に対して語る内容が「事実」とは言えないのではないかという疑念がある。報告者が、サポーターの声を奪っているのではないか。

インタビューを通じ、サポーターと報告者とが協働し、過去の出来事を意味づけていく(客観的な事実に到達できるわけではない)。

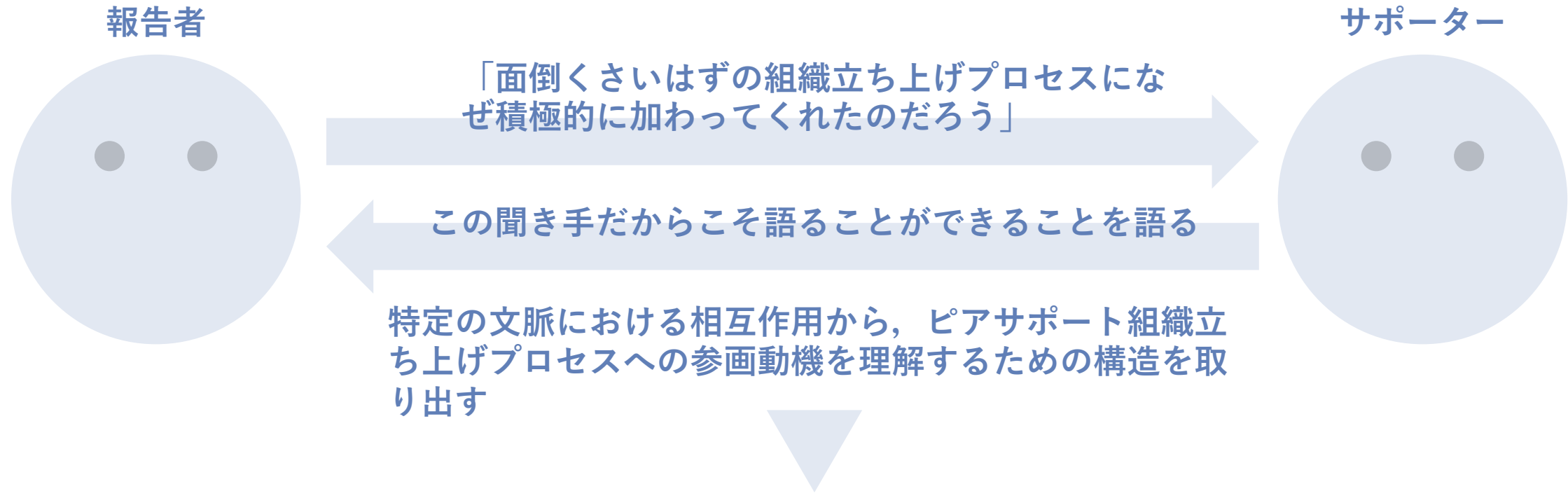
過去に体験された出来事は、言葉によって語られることによって、その場でつくられる。そのうえ、語りには現在の語り手の動機も作用する。語り手はインタビューの場で語りを生産する演技者であって、十分に聴衆（インタビュアー、世間など）を意識して語るのである。彼／彼女はもともと持っている情報を提供するたんなる〈情報提供者〉ではないのである。（桜井、2005）

インタビューでの語られ方は、語る相手によっても変化していく。

語り手と聞き手の相互行為から、ストーリーは生み出されますが、それはその場の状況的文脈によって変化します。したがって、語り手の物語は、語る相手によっても、場の雰囲気や状況によっても影響されます。また、語り手と聞き手は、一方的な関係ではなく、対話的關係として、共に物語生成にかかわります。（やまだ、2000）

報告者の問題意識に忠実に、人間と人間の相互作用の流れを読み取る。

修正版M-GTAは、grounded on dataの原則、分析の厳密さは重視するが、そのために切片化は行わず、分析をする研究者（【研究する人間】）を前面に出してその問題意識に忠実に、データを解釈していく。データを切片化するのではなく、つまり、データの中に表現されているコンテキストを破壊するのではなく、むしろコンテキストの理解を重視する。……人間と人間の複雑な相互作用がプロセスとして進行するわけであるから、その全体の流れを読み取ることが重要であると考えからである。（木下、2003）



得られた構造の射程を読み手が判断できるように、
どのような文脈で得られたデータなのかが明らかになるように記述しなければならない（西條, 2008）

- 宇都宮大学のピアサポート組織の特徴は何か。
- どのような状況でインタビューが実施されたか。
- 報告者とサポーターはどのような人物か。
- 報告者とサポーター、およびサポーター同士はどのような接し方をしているか。

調査実施の状況と人物像

インタビュー調査が実施された状況

インタビューは2024年3～5月に実施された。2023年度は、宇大ラーニングサポーターがスタートした年であると同時に、夏にサポーターの人数を大幅に絞り込み、**意欲の強いサポーターのみで構成される組織をつくるために試行錯誤する年**であった。サポーターたちは、サポート活動を行いながらも、よりよい組織をつくるために様々なアイデアを持ち寄り、ディスカッションを重ねてきた。ようやく組織として安定してきた12月～1月にかけては、新たなサポーターも迎え入れることができた。

こうした状況で、年度末には、**1年間の活動の総決算をし、かつ新年度からの活動に力を入れるために、サポーター一人ひとりが以下の内容について文書にまとめ、担当教員（報告者）に提出することとなった。**

- 2023年度の活動において重視していたこと
- 2023年度に取り組んだ具体的な活動と、その活動に対する自己評価
- 2024年度前期の活動の目標（自分なりの目標を設定）
- 目標を達成するために、2024年度前期に取り組んでいきたい具体的な活動

本報告におけるインタビューは、上記の文書が提出された直後に実施された。そのため、**各サポーターはこれまでの活動を思い起こし内省をするともに、今後のビジョンについてある程度具体像を思い描いた状態でインタビューに臨んだ**と考えるのが自然である。

また、2023年度は**組織づくりに多くの時間と労力を割かざるを得なかった**ため、これまでの活動のふり返りにおいて、**サポーターは組織づくりについて多くの言及をすることになった**と考えるのが自然である。

報告者とサポーターの人物像

報告者の人物像

報告者は、2017年度に宇都宮大学に着任した。2017年度から宇都宮大学のラーニング・コモンズの運営を任されるとともに、ラーニング・コモンズ学生スタッフの管理も行うこととなった。

2020年度からは、ラーニング・コモンズ学生スタッフと並行して実施されることとなった全学ピアサポート（コロナ禍を契機に開始）の担当にもなった。このことをきっかけとして、現在に至るまで宇大ラーニングサポーターの担当を務めている。**一貫してピアサポート関連団体の担当者となっている。**

サポーターの人物像

サポーターは以下のように3つに分類できる。

- ① 宇都宮大学ピアサポーターが始まる以前から、ラーニング・コモンズ学生スタッフもしくは前身組織で意欲的に活動していたサポーター
- ② 宇都宮大学ピアサポーターが始まると同時に、意欲的な活動を開始したサポーター
- ③ 宇都宮大学ピアサポーターの組織が安定してきた時期に、新規に活動を開始したサポーター

①と②のサポーターは、活動意欲が乏しいサポーターが活動から離れた後も、引き続き意欲的な活動を行ってきた。後述するように、宇都宮大学ピアサポーターでは特定のリーダーを決めていないため、**サポーターは、全員が一定水準以上の主体性を発揮し、「今何をすべきか」を考え行動してきた。**

③のサポーターは、**サポーターとして活動するために受講が必須となっている授業を受講し、その後サポーター採用面接を通過し、活動を開始した。**

報告者とサポーターの接し方

日常的な接し方：極めて密なコミュニケーションを行う

宇大ラーニングサポーターは、報告者とサポーターとの情報共有ツールとしてDiscordを活用している。現在進めている取組の進捗状況確認、新たな取組の提案、有益な情報の交換、困りごとの相談、何気ない雑談なども含め、日々様々なコミュニケーションを行っている。また、Discord上で情報共有が行われた際には、速やかに確認済みのリアクション（👍等を付ける）をすることが徹底されている。

こうした日々のコミュニケーションが、**報告者とサポーターとの間で認識の差が生じることを防ぐとともに、両者の間でコミュニケーションのハードルを可能な限り低下させている。**

もちろん、互いに時間の合うときには対面でのコミュニケーションも行うが、教員である報告者は、指示や指導を行うという姿勢ではなく、**傾聴力を発揮してサポーターが現在考えていることを最大限引き出すことに徹している。**

活動やミーティングでの接し方：指示を出さず一歩引いて見守る

サポート活動や学修関連の企画実施時には、報告者が傍らでその様子を見守っている。報告者がサポーターに指示を出すことはあまりなく、不測の事態が発生した際も、**学生の立場で対処可能であると判断できる場合には、報告者が手助けを行うことはない。**

定期的なミーティングにおいても、議事進行の全てをサポーターが行うこととし、**報告者は一歩後ろに下がった席で話し合いの様子を見守っている。**ただし、実現不可能な提案がなされた場合、サポーターに不利益が被ることが予想される提案がなされた場合、金銭が絡む提案がなされた場合には、報告者はサポーターに対して再考するよう促している。

その場合でも、報告者の発言を参考にし、**最終的な決定をサポーター自身で行うこととしている。**

サポーター同士の接し方

フラットなコミュニケーション：全員がリーダーシップを発揮する(日向野, 2018)

サポーター同士は、**学年が違っても互いにフラットな関係性を築いている。**上級生が下級生を指導するという場面はあまり見られず、それぞれの立場で「今何をすべきか」ということを判断し、活動を行っている。したがって、場合によっては下級生が上級生に対してアドバイスや知識の提供を行いながら、日々の取組を行っているという光景を頻繁に見ることができる。

ミーティングにおいても、下級生が積極的に司会進行を務めたり、学年を問わず互いの意見に対して自身の意見をぶつけたりする、といった場면을頻繁に見ることができる。

こうした状況は、**特定のリーダーを置かず、全員がリーダーシップを発揮すべきという文化が根づいている**からこそ実現できていると考えられる。

なお、全員がリーダーシップを発揮すべきという考えは、各種研修や、新規採用プロセスにおいてサポーター全員が身につけている。

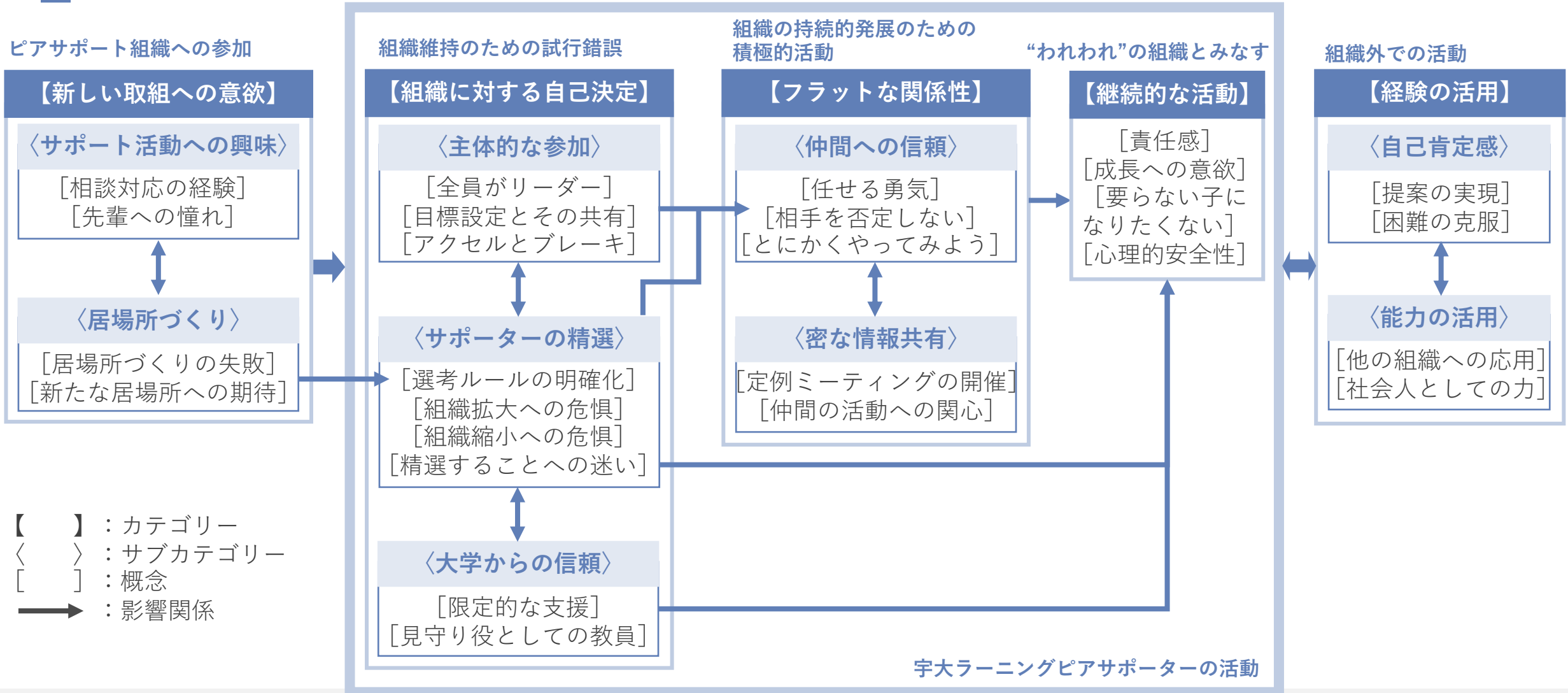
新たなアイデアや取組の積極的な提案：心理的安全性を確保する(Amy, 2019)

各サポーターは、既存の取組を継続的に行うだけでなく、ミーティング等で**新たなアイデアを互いに出しあい、新規取組を実現していくことに意欲的である。**新たなアイデアに対して否定的な意見が出されることはほとんどなく、どのような工夫をすれば実行可能かという観点で互いに議論を行っている。また、既存の取組の改善提案についても、否定的意見が出されることは減多にない。

こうした状況は、**互いのアイデアを尊重し、建設的な議論を行っていくことが可能な、心理的安全性が確保されているという確信を互いに持っている**からこそ実現できていると考えられる。

なお、心理的安全性の確保については、各種研修や、新規採用プロセスにおいてサポーター全員が理解を深めている。

インタビューの結果と分析(2025年2月時点)



カテゴリー	サブカテゴリー	概念	定義
新しい取組への意欲	サポート活動への興味	相談対応の経験	これまでにピアサポート活動に類する経験、もしくは印象的な相談対応の経験があること。
		先輩への憧れ	先輩のサポーターからの確かな助言を得ることができ、自身もそのような存在になりたいと思うこと。
	居場所づくり	居場所づくりの失敗	これまでに自身にとっての居場所をつくったり見出そうとしたが、結局そこが居場所とはならなかったということ。
		新たな居場所への期待	自身にとっての確かな居場所を手に入れることができるのではないかと期待を持つこと。
	組織に対する自己決定		
組織に対する自己決定	主体的な参加	全員がリーダー	特定のリーダーを置かず、全員が「今何をやるべきか」を考え、主体的に行動すること。
		目標設定とその共有	皆で議論を重ね、組織や個人の目標を自分自身で設定し、これらの目標が全員に共有され、常に目標を意識した取組を行うこと。
		アクセルとブレーキ	組織としての活動を強く推進する役割と、冷静な行動や決断を促す役割とが、バランスを取ること。
	サポーターの精選	選考ルールの明確化	サポーターの選考手順、選考基準などを随時改善し、明確に示すことで、組織にとって必要な人材を確実に確保すること。
		組織拡大への危惧	サポーターの人数が増えることで、円滑なコミュニケーションや、同じ熱量での活動ができなくなるのではないかと不安に感じる事。
		組織縮小への危惧	サポート活動への熱意を強く求めるがゆえに、活動に加わる人が減少し、組織が縮小していくのではないかと不安に感じる事。
		精選することへの迷い	サポーター希望者や現メンバーへの人間的な情が生まれ、精選することに躊躇してしまうこと。
	大学からの信頼	限定的な支援	大学が組織に対して必要最低限の支援のみを行うこと。
		見守り役としての教員	教員はサポーターの活動内容についてほとんど口を出さないが、ミーティングや日々の活動の際にはその場でサポーターを見守ること。
継続的な活動		責任感	大学の公的なピアサポート組織として活動しての強い自覚を持ち、日々の活動に取り組むこと。
		成長への意欲	ピアサポート組織の中での活動を通じ、自らの長所・短所を自覚し、組織により貢献できる人間になろうとすること。
		要らない子になりたくない	過去の自分自身の組織に対する貢献度と比較し、現在の貢献度が低下することにより、必要無い人間と思われることを恐れること。
		心理的安全性	互いの意見や取組を歓迎し、建設的な議論を行い、よりよい意見や取組をつくり出していく雰囲気があると皆が確信していること。
フラットな関係性	仲間への信頼	任せる勇氣	他のサポーターの経験や能力などを見極め、やるべき取組を適切な人に任せること。
		相手を否定しない	他のサポーターの意見を遮ることなく、いったん受け止め、その人が何を望んでいるかしっかり考えること。
		とにかくやってみよう	新たな取組が提案された際に、互いに背中を押し、どうすれば実行に移すことができるか皆で考えること。
	密な情報共有	定例ミーティングの開催	現在の取組内容、その取組に必要な意識などについて情報共有するための定期的なミーティングを開催すること。
		仲間の活動への関心	現在他のサポーターが行っている活動について、自ら情報を入手し、理解を深めようとする事。
経験の活用	自己肯定感	提案の実現	自身や他のサポーターの提案を実現するために、必要な努力を重ねること。
		困難の克服	組織運営や日々の活動において直面する困難に対し、解決策を見出すために努力すること。
	能力の活用	他の組織への応用	サポーターとしての活動経験を、就職先やサークル活動などで活かすこと。
		社会人としての力	サポーターとして活動することで、社会に出た後も活用できる汎用的能力を身につけること。

ストーリーライン

宇大ラーニングサポーターが始まる前、もしくは始めると同時に活動を開始した学生は、組織立ち上げのプロセスに参画した動機として、根底に〈居場所づくり〉への意欲があった。この意欲は、これまでに〔居場所づくりの失敗〕を経験したことによる、〔新たな居場所への期待〕によって生じていた。その後、〈サポート活動への興味〉を強めていった。

一方、組織がある程度軌道に乗ってから立ち上げプロセスに参画したサポーターは、根底に〈サポート活動への興味〉があった。これは、過去に何らかの〔相談対応の経験〕や、相談に乗ってくれた〔先輩への憧れ〕によって生じていた。その後、〈居場所づくり〉への興味も強めていった。

これらの動機は、いずれも【新しい取組への意欲】の現れである。この意欲は、【組織に対する自己決定】を追求する。具体的には、〔全員がリーダー〕としての意識を持ち、組織と個人の〔目標設定とその共有〕を行い、〔アクセルとブレーキ〕のバランスを取りながら〈主体的な参加〉を行うということである。

そのためには、〈サポーターの精選〉が不可欠であり、これは〈居場所づくり〉のためにも重要である。精選する際には、〔組織拡大への危惧〕や〔組織縮小への危惧〕、さらには〔精選することへの迷い〕が生じる恐れもあるため、予め〔選考ルールの明確化〕が求められる。

〈サポーターの精選〉を実行し、ますます〈主体的な参加〉が見られるようになると、大学からは〔限定的な支援〕のみを与えられ、自由に活動できる余地が増加することが望まれる。また、担当教員も〔見守り役としての教員〕といった役割が求められる。これらのことは、〈大学からの信頼〉を得ることで可能になる。

〈主体的な参加〉と〈サポーターの精選〉は、〈仲間への信頼〉感を高め、学年等は関係無く互いに〔任せる勇気〕を発揮することを可能とした。さらには、皆の提案に対して〔相手を否定しない〕姿勢で臨み、〔とにかくやってみよう〕と言える【フラットな関係性】を築いていく。

こうした関係性は、〔定例ミーティングの開催〕や〔仲間の活動への関心〕を持ち、〈密な情報共有〉を行うことでさらに強化される。

【組織に対する自己決定】と【フラットな関係性】は、〔責任感〕や〔心理的安全性〕を醸成し、これが【継続的な活動】につながっている。また、特に〈サポーターの精選〉と〈大学からの信頼〉は【継続的な活動】の意欲を支えている。

このような特徴を持った組織での活動は〔自己肯定感〕を高め、様々な場面で〔能力の活用〕が可能となり、活動外での【経験の活用】も促していく。また、こうした【経験の活用】を通じて得られた知識や経験は、日頃のサポーターとしての活動にも活かされている。

暫定的な結論

下記の記述は、宇大ラーニングサポーターの特徴、インタビューが実施された状況、報告者とサポーターの人物像などを踏まえて理解する必要がある。

- ① 立ち上げ期のピアサポート組織に加わろうとする動機は、最初期の参加者は、居場所づくりへの関心（立ち上げプロセスそのものへの関心）である。その後サポート活動への興味を強めていく。

この居場所は、当初は「人間的居場所」を意味し、その後「社会的居場所」を意味するようになったと考えられる。

- ② 立ち上げ期のピアサポート組織に加わろうとする動機は、ある程度軌道に乗ってからの参加者は、サポート活動への興味である。その後居場所づくりへの興味を強めていく。

この居場所は、「社会的居場所」を意味していると考えられる。

- ③ ピアサポート組織の立ち上げプロセスに深く参画する動機は、組織に対する自己決定とフラットな関係性が実現されている居場所を確立したいというものである。

この居場所は、「社会的居場所」かつ「永続的居場所」を意味していると考えられる。

人間的居場所：自分であることを取り戻すことのできる場所

社会的居場所：自分の資質や能力を発揮できる場所
(藤竹, 2000)

一時的居場所：場所の意味の承認や場所への所属が求められない場所（参入・退出が容易）

永続的居場所：個人を持続的で安定的な関係性のうちに包摂する場所（参入・退出が困難）

(尾添, 2019)

展望

- ① 別のピアサポート組織のサポーターを対象に調査を行った際には、現象学的地理学の「場所に対するアイデンティティの類型化」（Relph 1976=1999）を参照しつつ、以下の結論に至った。

大学生は、大学進学とともに、様々なコミュニティに**自由に参入・退出**し、それに**自ら意味づけを行う**ことで「居場所」を見出せると期待している。自由な参入・退出を阻むことや、第三者が一方的な意味づけを行うことは、大学生ならではの期待を満たすことにはつながらない。**複数の「居場所」をつくることで、大学生ならではの期待に応える必要がある。**

「自由な参入・退出」が可能であるときにのみ「自ら意味づけを行うこと」が可能であるかのように論じていた。

「参入・退出が困難」であるが「自ら意味づけを行うこと」が十分に可能な組織（例：宇大ラーニングサポーター）についても、複数の「居場所」のひとつに加えなければならない。

- ② 宇大ラーニングサポーターとしての活動において、教職員はどのように関与するのが望ましいのか、ということについても引き続き考えていく。教職員は役に立つのだろうか。役に立つとするならば、どのようなときに、どのような形で役に立つのだろうか。

1. 宇大ラーニングサポーター（宇サポ）の概要
2. 宇サポ創設の経緯
3. 【参考】宇サポはなぜ熱心に活動するのか
4. 【参考】学生参画の一環としての宇サポ
5. 文献



学生参画とは

学生参画とは、①学生個人及び同輩の学習成果を最大化する目的で、または、②大学教育の質を保証・向上させる目的で、あるいは、③大学運営に学生・大学・社会の利益を反映させる目的で、学生が自らの労力や情報を大学に提供することである。

ミクロレベル：学生個人や他の学生の学修活動への参画

個人の学習成果を高めること、ピアサポートなど

メゾレベル：質保証・向上プロセスへの参画

アメリカの全国学生調査（NSSE）、アクレディテーション団体への参加、学生報告書の作成、外部評価団との面談、学生FDなど

マクロレベル：戦略策定（ガバナンス）への参画

教員学生協議会などへの出席

（田中 2018）

適切な学生参画とは、大学の組織学習に有効な（不完全ではなく、歪曲化もされていない）フィードバックを提供することを意味する（山田 2021）。

学生参画のゴール

教育体験の向上 (Enim et al. 2024; Bulvinska and Chervona 2020)

学習環境に影響を与えるプロセスに学生を参加させることにより、学生のニーズや好みに合った、よりカスタマイズされた効果的な教育戦略につなげる。

ユニバーシティ・カレッジ・ロンドンやヘルシンキ大学などの大学は、学生の声を教育実践に統合するモデルを導入しており、学習成果へのプラスの影響を実証している (Bulvinska and Chervona 2020)。

ガバナンスの改善 (Palma et al. 2023; Bulvinska and Chervona 2020)

学生をガバナンスに参加させることで、大学はより良い意思決定と政策立案に貢献する多様な視点と革新的なアイデアを得ることが可能となり、学生のニーズと期待を反映した教育水準の維持と向上が期待できる。

民主的価値観の育成 (Yang and Hoskins 2022; Kennedy and Pek 2022)

学生にガバナンスと意思決定のプロセスへの関与を促すことで、大学は民主的価値観を伝えるためのプラットフォームとしての役割を果たす。

学生参画の推進において教職員が果たすべき役割(1)

学業および課外活動への学生の関与の強化 (Enim et al. 2024; Neary 2016)

教職員は、学生が学業活動と課外活動の両方に参加する機会を創出すべきである。これには、学生主導の取組の支援、学生の意見表明のためのプラットフォームの提供、質保証プロセスへの参加の奨励が含まれる。

ウィンチェスター大学は、学生参画に特化したセンターを設立し、学生と教職員との連携を強化することで学生参画を改善している (Lowe 2023)。

ガバナンスへの参加の促進 (Bulvinska and Chervona 2020; Lyamtane and Ogoti 2018)

教職員は、学生が意思決定の対等なパートナーであることを認識し、学生をガバナンスのプロセスに積極的に関与させるべきである。そのためには、大学運営に関わる組織（理事会や評議会）や各種委員会に学生代表を含めることで、学生代表の声を教育機関の決定に確実に反映させる必要がある。

「熟議ミニ・パブリック」のアプローチの導入により、共通の課題に関する包括的で真正な議論を促進し、学生の視点をガバナンスに効果的に組み込むことができる (Kennedy & Pek, 2022)。

学生参画の推進において教職員が果たすべき役割(2)

市民教育の促進 (Flores and Calva 2014)

大学は、市民教育をカリキュラムに組み込み、学生に市民としての責任感を持たせる必要がある。そのために、教職員は、学生参画の過程において社会問題についての批判的思考と反省を促す議論や活動を促進し、学生が地域社会やその先との関わりを深めるよう促すことができる。

参加障壁への対処 (Planas et al. 2013; Mariskind 2013)

教職員は、学生の参加を妨げる障害を特定し、適切に対処する必要がある。これには、教職員と学生とのコミュニケーションチャンネルの改善、意思決定プロセスの透明性の確保、学生の参画を促進するためのトレーニングとサポートの提供が含まれる。また、学生の多様性を考慮し、よりインクルーシブな学生参画となるようにすべきである。

学生参画を通じた学生の「学び」

内部質保証への学生参画は、能動的な市民としての生活に向けて学生を準備させることになる。

学生は学習「主体」として知識やスキルを応用できる形で修得し、カリキュラムと教育方法について理解するようになり、資質・能力の向上に向けた学習アプローチの採用に結びつけることができる。

ピア・サポートなど学生個人の学習活動に参画することによって、学習の自己制御が可能となり、さらに定期的な内部・外部質保証への参画によって、証拠を検討しながら、議論のロジックを組み立てる能力を身につけることができる

(山田 2024)

海外の学生参画とのギャップ

イギリスの大学の学生組合が「学生意見書」を作成できる理由 (田中 2024)

- 学生組合の豊富な資金力
- 学生代表の意思決定機関への参画
- 学生の声の組織的な集約

過去の学生参画の実態を明らかにすることの必要性 (中里 2024)

日本の大学教育における学生参画は事例研究の蓄積が十分でなかったこともあり、現在の学生参画型組織が過去の学生参画が抱える課題等を乗り越えて成立しているとは限らない。



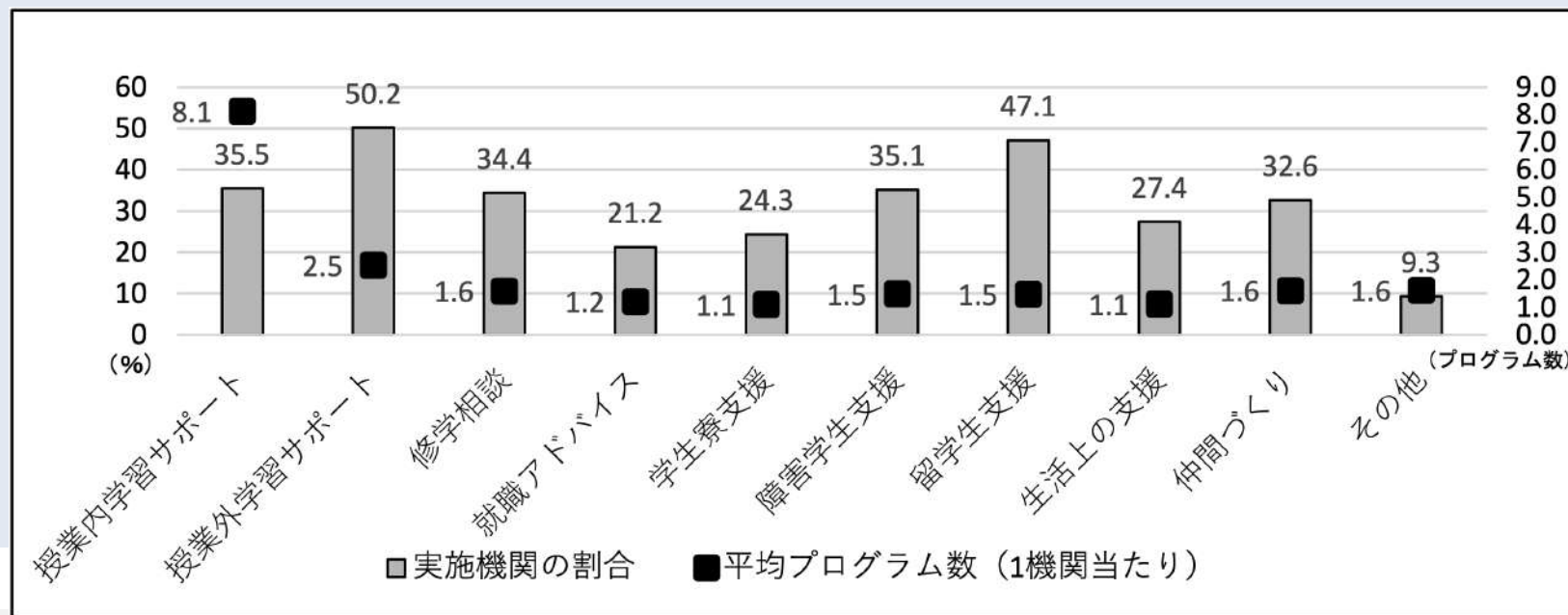
学生参画の日本的特質が明らかになる可能性も

ピアサポートの多様性(1)

日本学生支援機構によるピアサポートの定義 (日本学生支援機構 2020)

学生生活上の支援（援助）を必要としている学生に対し，仲間である学生同士で気軽に相談に応じ，手助けを行う制度。

ピアサポートの取組領域別の実施状況 (日本学生支援機構 2022)



注) ピア・サポートを「実施している」と回答した 518 機関の回答。

ピアサポートの多様性(2)

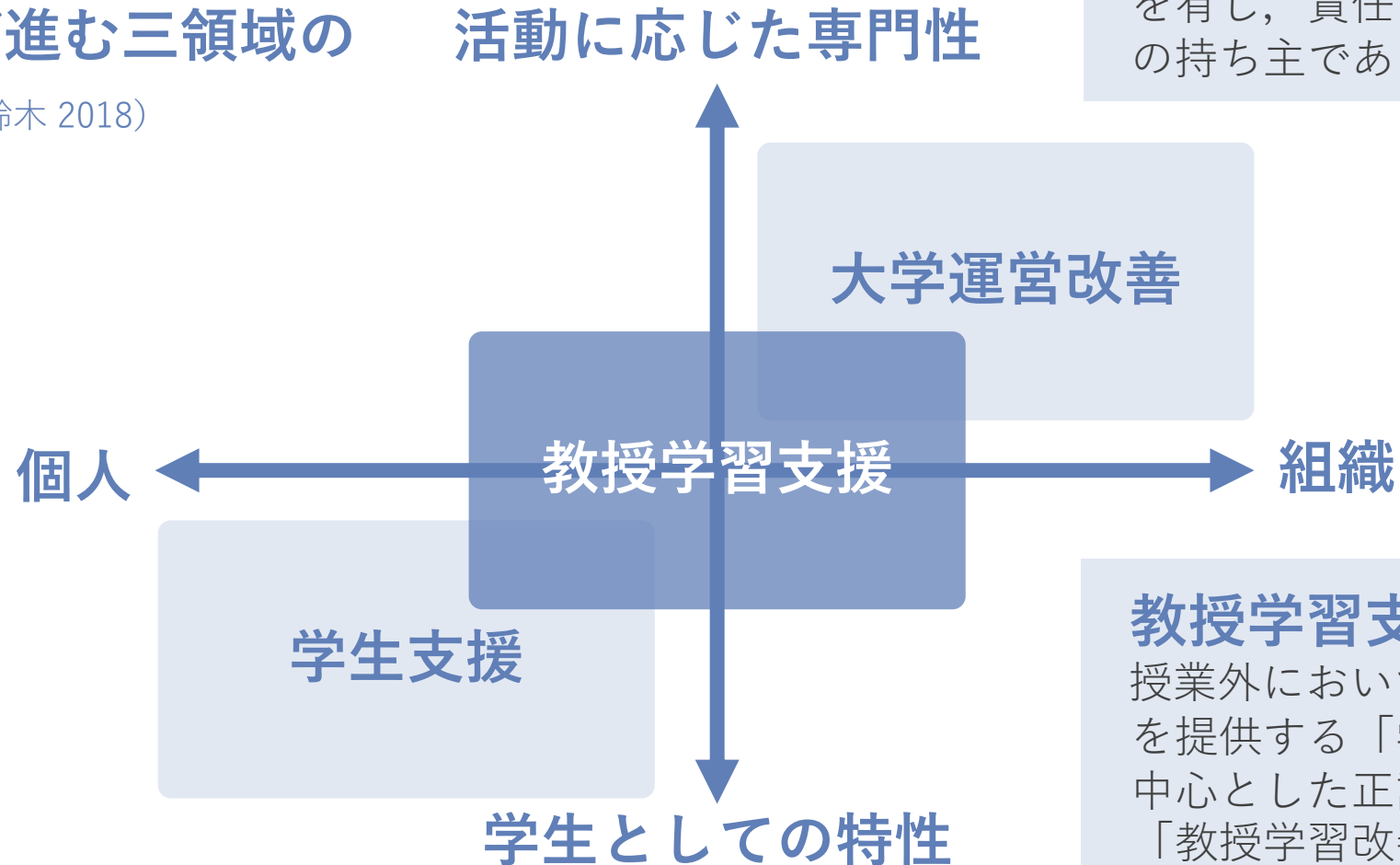
立命館大学のピア・サポート・プログラム (沖 2015)

支援対象	制度・団体名	担当部局	活動規模	謝礼	概要
学習支援	エデュケーション・サポーター (ES)	教育開発推進機構	600~650名程度	有	正課授業において学生が学生を支援する制度。学習支援、授業改善、ES自身の成長の3つの機能を持ち、教育活動の一環としての位置付け。
	サポート・スタッフ	障害学習支援室	約 90 名	有	授業支援 (ノートテイクなど)、論文作成支援 (文献のテキストデータ化など)、支援スキル養成講座・啓発イベントの企画・実施。
	学部講師	理工学部事務室	23 名	有	BKC のピアラ (物理駆け込み寺) で学生の学習支援に従事。
新入生支援	アカデミック・アドバイザー (AA)	スポーツ健康科学部事務室	約 12 名	有	スポーツ健康科学部新入生の学習支援。
	オリター・エンター	学生オフィス	約 730 名	補助有	クラス懇談会、基礎演習、サブゼミ、新歓祭典、FLC (フレッシュマンリーダーズキャンプ)、オリエンテーション企画における上回生が新入生の大学生活への導入を支援する制度。
キャリア支援	ブレースメント・リーダー (PL)	キャリアオフィス	衣笠・BKC 計約 200 名	無	各ゼミから選ばれる就職活動のリーダー。
	ジュニア・アドバイザー (JA)	キャリアオフィス	約 400 名	一部有	就活を終えた4回生・修士2回生による低回生に対する懇談会や就職活動体験報告会開催などの就職活動支援。
留学生支援	留学アドバイザー	海外留学課	約 200 名	有	過年度派遣学生による留学に関する情報提供、説明会、留学支援企画等実施。
	留学生支援スタッフ (TISA)、バディ	留学生課	衣笠・BKC 計約 80 名	無	留学生の正課外を中心とした支援の実施。
留学支援	グローバル・ゲートウェイ・プログラム「まいる」	国際教育推進機構	約 10 名	無	前年度 GGP で海外に留学した先輩が後輩を支援。留学準備や被支援者の留学を通じた将来設計の支援。

ボランティア支援	学生コーディネータ	共通教育課	衣笠・BKC 計約 35 名	無	学内外のボランティア活動と学生との連携。
図書館利用支援	ライブラリー・スタッフ	図書館サービス課	衣笠・BKC 計約 150 名	有	利用者の配架業務等の基本業務に加え、図書館利用促進を目的としたポスター作成、検索ガイダンスなどのプロジェクトの実施。
情報システム利用支援	レインボー・スタッフ	情報基盤課	衣笠・BKC 計約 100 名	無	マルチ・メディア・ルームやサービス・カウンターでの利用者支援を柱に、情報教室の機器管理やプロジェクト活動の実施。
	A スタッフ	情報基盤課	BKC5~10 人	有	「UNIX ガイド」の執筆・編集やシステムリプレイスに伴う環境整備。
国際平和ミュージアム支援	ミュージアム・スタッフ	教育文化事業課	約 60 名	有	ミュージアム利用者サービス・援助業務の補助、資料整理。
広報支援	学生広報スタッフ	広報課	衣笠・BKC 計約 70 名	一部有	学内の情報を分かりやすく楽しく知ってもらえるよう学生の視点による企画立案や情報の発信。
入試支援	入試広報学生スタッフ	入試課	?	有	オープンキャンパスなど、受験生に本学をよりよく知ってもらうことを目的とした企画・運営などを担当。
キャンパス案内支援	キャンパス・ナビゲーター	入試広報課	衣笠・BKC 計約 200 名	有	来校者向けキャンパス・ツアーの実施。
	附属校キャンパス・ナビゲーター	一貫教育課	衣笠・BKC 計約 60 名	有	学内推薦進学者を対象としたキャンパス案内の実施。
	インテグレーション・コアナビゲーター	スポーツ健康科学部事務室	約 10 名	有	スポーツ健康分野関連施設見学者への説明・案内。
	オープンキャンパス・スタッフ	入試広報課	衣笠・BKC 計約 200 名	有	受験生に立命館大学をよりよく知ってもらうことを目的とした企画の実施。
学部独自の取組	薬学部ファーマ・アシスタント	薬学部事務室	約 35 名 (2012 年度前期)	有	薬学部 5・6 回生による 4 回生以下に担当されている実習・演習、必修科目に対する教育補佐・援助。
	アドバンスト・コーチング (実習) プログラム	スポーツ健康科学部事務室	5 名	無	「スポーツ方法実習」に実習生として参加し、実践を通して指導力の向上と学びの深化を目指す活動。
	D-staff (D-PLUS)	産業社会学部	20 名	有	施設改善提案や学生向けのコンピュータソフト講習などの D-PLUS 企画を行うマネジメントチームと広報ムービー作成などの事務室からの依頼業務を行うクリエイティブチームから構成。

ピアサポートの多様性(3)

学生参画が進む三領域の
位置付け (鈴木 2018)



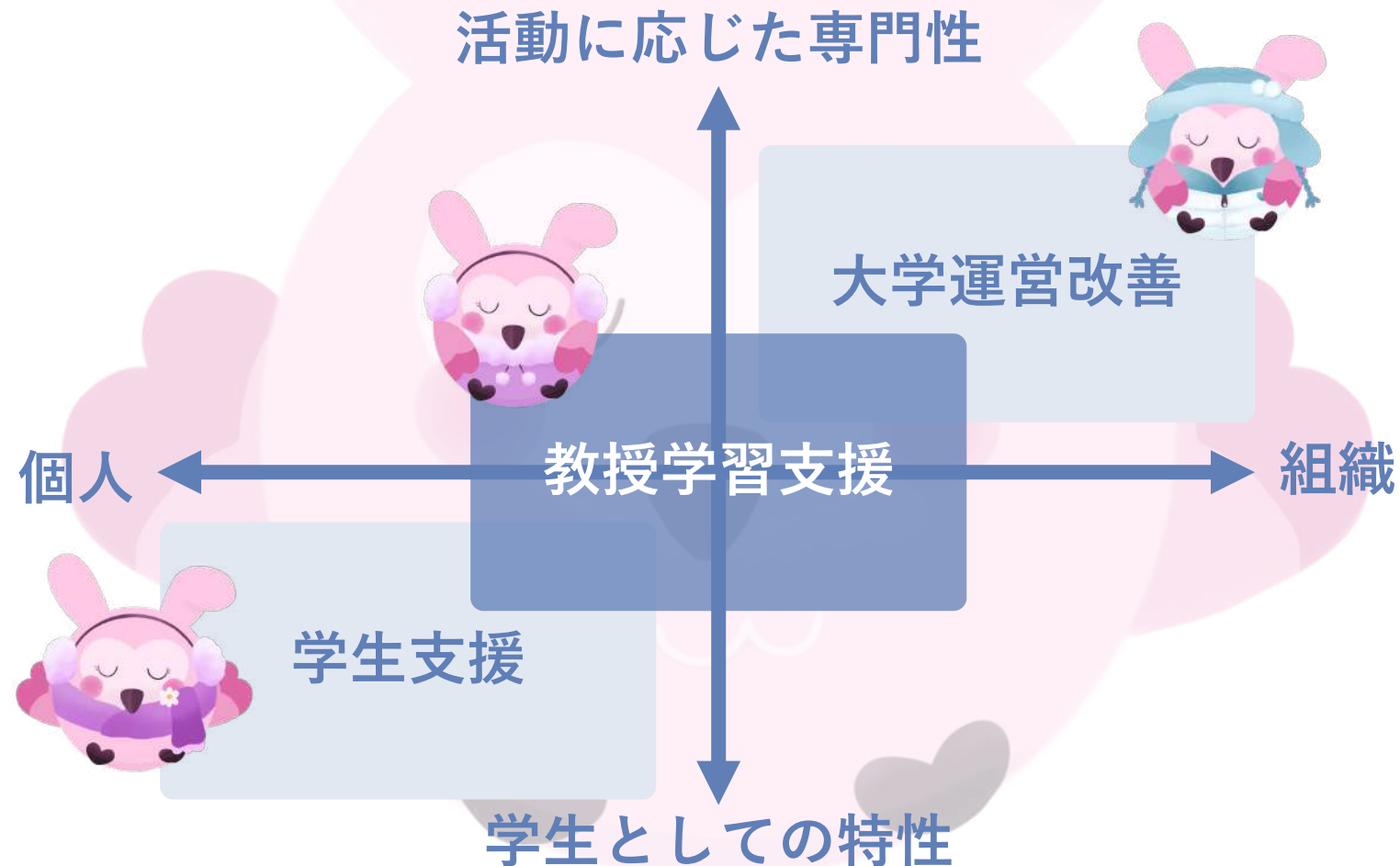
大学運営改善

参画する学生は、全学生を代表する責任を有し、責任に見合った高い資質・能力の持ち主であることが求められる。

教授学習支援

授業外において教育課程に関連する支援を提供する「学習支援領域」と、授業を中心とした正課教育での支援を展開する「教授学習改善領域」をまとめたもの。

学生による自律的な組織として、学生たちには宇サポに居場所を見出してもらいながら、三つの領域をカバーする学生参画を実現していきたい（という長期的な野望）。



文献

- Amy C. E., 2019, *The Fearless Organization: Creating Psychological Safety in the Workplace for Learning, Innovation and Growth*, New Jersey: John Wiley & Sons. (野津智子訳, 2021, 『恐れのない組織: 「心理的安全性」が学習・イノベーション・成長をもたらす』英治出版.)
- Bulvinska, O., and Chervona, L., 2020, "Students' participation in quality assurance at university," *Continuing Professional Education: Theory and Practice*, (3): 95-101.
- Enim, R. P., Alzmet, L., and Rónay, Z., 2024, "Participation of Students in all Areas of Governance in Higher Education Institutions in the Light of the Literature – A Systematic Review," *International Journal of Cognitive Research in Science, Engineering and Education*, 12(2): 437-50.
- Flores, H. G. H., and Calva, J. M. L., 2014, "La participación estudiantil como estrategia de formación ciudadana para la educación en valores en el nivel superior," *Revista de Comunicación de la SEECI*, (35E): 43-58.
- 藤竹暁, 2000, 「居場所を考える」藤竹暁編『現代人の居場所』至文堂, 47-57.
- 日向野幹也, 2018, 『高校生からのリーダーシップ入門』筑摩書房.
- Kennedy, J. C., and Pek, S., 2022, "Mini-publics, student participation, and universities' deliberative capacity," *Studies in Higher Education*, 48(1): 63-82.
- 木下康仁, 2003, 『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践: 質的研究への誘い』弘文堂.
- Lowe, T., 2023, "The Centre for Student Engagement: A Research and Development Center for Students, Faculty, and Staff at the University of Winchester," Neisler, O.J. eds., *The Palgrave Handbook of Academic Professional Development Centers*, Cham: Palgrave Macmillan, 269-82.
- Lyamtane, Rev. E., and Ogoti, E., 2018, "Participation of students in University Governance: A case of Mwenge Catholic University, Tanzania," *International Journal of Scientific Research and Management*, 6(03): 169-82.
- Mariskind, C., 2013, "'Always allowing the voice': expectations of student participation and the disciplining of teachers' practice," *Teaching in Higher Education*, 18(6): 596-605.
- 中里祐紀, 2024, 「日本の大学教育における学生参画の変遷と課題」『比較教育学研究』69: 91-109.
- Neary, M., 2016, "Raised Voices: from student engagement to political engagement," *Student Engagement in Higher Education Journal*, 1(1): 1-5.
- 日本学生支援機構, 2020, 『大学等における学生支援の取組状況に関する調査(令和元年度(2019年度))結果報告』日本学生支援機構.
- 日本学生支援機構, 2022, 『大学等における学生支援の取組状況に関する調査(令和3年度(2021年度))結果報告』日本学生支援機構.
- 沖裕貴, 2015, 「『学生スタッフ』の育成の課題: 新たな学生参画のカテゴリーを目指して」『名古屋高等教育研究』15: 5-22.
- 尾添侑太, 2019, 「居場所概念の再検討: 子ども食堂における参与観察をとおして」『ソシオロジ』64(2): 39-56.
- Palma, A., Mourato, J., Vinagre, J., Almeida, F., and Pessoa, A. M., 2023, "Student Participation: Issues for the Governance of Higher Education," *Societies*, 13(5): 115.
- Planas, A., Soler, P., Fullana, J., Pallisera, M., and Vilà, M., 2013, "Student Participation in University Governance: the Opinions of Professors and Students," *Studies in Higher Education*, 38(4): 571-83.
- Relph, E., 1976, *Place and Placelessness*, London: Pion Limited. (高野岳彦・阿部隆・石山美也子訳, 1999, 『場所の現象学: 没場所性を越えて』筑摩書房.)
- 西條剛央, 2008, 『ライブ講義・質的研究とは何か SCQRMアドバンス編: 研究発表から論文執筆, 評価, 新次元の研究法まで』新曜社.
- 桜井厚, 2005, 『ライフストーリー・インタビュー: 質的研究入門』せりか書房.
- 鈴木学, 2018, 「日本の高等教育における学生参画型支援プログラムの『質保証』体制構築に関する実践的研究: 学習支援の取組みに焦点を当てて」東北大学大学院教育学研究科2017年度博士論文.
- 田中正弘, 2018, 「日本の大学における学生参画: 質保証への参画を中心として」『大学研究』45: 17-30.
- 田中正弘, 2024, 「イギリスの大学における教育評価への学生参画」『比較教育学研究』69: 5-24.
- 山田勉, 2021, 『学生参加による高等教育の質保証』東信堂.
- 山田勉, 2024, 「なぜ学生参画は質保証につながるのか: 『日本型』学生参画の理論構築に向けて」大学基準協会大学評価研究所編『質保証における学生参画のあり方に関する調査研究報告書』5-37.
- やまだようこ, 2000, 「人生を物語ることの意味: ライフストーリーの心理学」やまだようこ編著『人生を物語る: 生成のライフストーリー』ミネルヴァ書房, 1-38.
- Yang, J., & Hoskins, B., 2022, "Does university participation facilitate young people's citizenship behaviour in the UK?," *Cambridge Journal of Education*, 53(2): 195-213.